

昭和からの伝言(3)

—昭和天皇は何を語ったのか—

秘録・初公開・はいえつき 拝謁記から

土田 良吉

昨、令和元年8月、終戦記念番組の中でNHKは表記の「秘録・拝謁記」を約一時間に亘って放送した。—天皇(片岡孝太郎)田島氏(橋爪功)—。陸軍最後の現役兵として銃を執った自分(95歳)には、このチャンスは冥利に尽きるといふもの！。永久保存版にしたい、テレビ音声の活字化を試みました。ご一読ください。

終戦の翌年から全国各地へ巡幸を始めた昭和天皇は人間宣言を行い、新しい憲法で国民統合の象徴とされた。「戦災にも遭ったんだらう?」「いえ、戦災にはありません。」「新日本建設の歩みにお互い努力してみたいね」「はい」この会話にどん底にあった国民はどれ程励まされたことであらうか、

巡幸する天皇の後ろには、常に付き添う人物がいた。初代宮内庁長官田島道治(たじまみちじ)である。田島は、占領の時代、象徴とされた天皇を支え続けてい

た。その田島道治が残した貴重な記録がみつかった。「拝謁記」である。5年近く600回を超えた昭和天皇への拝謁。その記録から明らかになったのは敗戦の道義上の責任を感じていた昭和天皇の告白。「反省というのは私にも沢山あるといえはる」と。

手帳6冊ノート12冊にも及ぶ「拝謁記」を4人の研究者が読み解いた。「すごい！これだけの量を書いていることが。びっくり」と、異口同音であった。読むうちに、天皇も感情を持った生身の人間だったことが伝わってくる。なかなか衝撃的な一字一句、田島の子の言葉の記録しておこうと言う気持ちが見られる。—研究者4人のことばから—

「丁度、天皇のあり方が大きく変わる時期なので憲法が出来て大事な変わり目の天皇の肉声に分かる意味で大変に貴重な資料だと思います。敗戦の責任を感じていた昭和天皇は戦争について、国民の前で話したいと強く希望していた。日本の独立回復を祝う式典でのお言葉についてであるが、拝謁記にはその内容の事、田島とのやり取りが対話形式で記されている」と。

テレビ番組ではその一字一句忠実に再現していく。昭和天皇は戦争責任について田島に問いかけた。

「私の責任の事だが従来のようにカモフラージュ・曖

味にするか、きちんと実情を話すかの問題があると思
う」と、田島「その点今日からよく研究いたします」。

多くの犠牲者を出した太平洋戦争、天皇は反省にこだ
わり続けた。「私は反省という字をどうしても入れね
ばと思う。」と強く仰せになった。ところが総理大臣
の吉田茂は「戦争に言及した文字の削減を求めてきた
田島「総理大臣の考えと致しましては戦争とか敗戦
とか生々しいことは避けたいという意味であります」
天皇「しかし戦争のことを言わないで反省のことがど
うしてつなぐか」と仰せになった。

戦後象徴となった昭和天皇は何を語ったのか。初公
開された「拝謁記」で昭和天皇の、どのような実像が
浮かび上がってきたのか。その出発点を求めてゆく。
田島道治の遺族のもとで永い間厳密に保管されて
きた「拝謁記」について、孫の田島圭介さんは言う、
「戦後間もない時期、祖父道治と同じ家で暮らしてい
た。この「拝謁記」が奇跡的に残されたのには、いき
さつがある。「祖父が晩年、入退院を繰り返していた
が、入院するときに身辺整理と言うことで拝謁記を焼
こうとした。叔父がそれを止めたそうです。「決して
悪いようには取り扱わないから焼かないで取り残し
なさい」と叔父が祖父を説得して、かろうじて焼却は

免れました。叔父が亡くなり、時代も昭和から平成令
和へと変わる中でこの資料を公開することにした」と
言う。
―語り手広田修子―

田島道治が宮内庁の全身、宮内府の長官に就任した
のは1948(昭和23)年6月5日、終戦から3年。占
領下にあつて、宮中の改革が求められていた。長官人
事について、時の総理大臣芦田均(ひとし)が白羽の矢
を立てたのが、田島道治だった。初めての民間からの
登用だった。田島(1885〜1968)は当時⁶²歳。
戦前、金融恐慌後の銀行の建て直しに尽力した、その
再建の手腕が買われたのである。

当初、外部からの長官登用に難色をしめしたといわ
れる昭和天皇。しかし「拝謁記」には皇室と国民の関
係をよくしていこうという天皇の理解がしめされ、天
皇の実像が浮かび上がっている。

天皇は田島に対し、「皇室と国民の関係を、時勢に
合うようにもつと良くして行かなければと思う。私も
微力ながらやる積もりだ。長官も私のことで気付いた
ら言ってくれ」と。田島「勿体ない仰せで恐れ入りま
す」。田島は新憲法の理念に沿うよう側近からの意識
改革を図り、宮中の合理化を押し進めていった。当時
田島が直面したのは天皇の戦争責任問題だった。大日

本帝国憲法では天皇は、軍を統帥し統治権全てを握っていた。日本政府は天皇を、国内法上では法的無答責とした。然し、敗戦の道義的責任を問い、退位を求める声があった。

東京帝国大学総長南原繁は「陛下に政治上、法律上の責任はないが道徳的な責任がある」と述べた。

日本の戦争指導者を裁く東京裁判判決が近づくと退位の論説がメディアで更に広がっていく。昭和天皇の退位を押し止めたのが連合国最高司令官マッカーサーだった。『占領統治の天皇の存在が欠かせない』と考えたマッカーサーはその意向を天皇に伝えた。これを受けた天皇の返答が残されている。マッカーサー記念館1948年11月12日に、田島道治が天皇に代わってマッカーサー宛に送った書簡がある。

「今や、私は日本の国家再建のため国民と力を合わせ最善を尽す所存です」と。事実上退位しないとの意思を示したこの書簡、これで昭和天皇の退位問題には決着がついたと、従来の研究では考えられてきた。しかし今回発見された「拝謁記」から、その翌年も退位の可能性を語っていたことが明らかになった。

天皇「情勢が許せば退位とか、2月19日講和が締結された時に又退位等の論が出て、情勢が許せば退位

とか譲位とかいうことも考えられる。その為には東宮ちゃんが早く洋行するのがよいのではないか。東宮皇太子はまだ15歳。早めに外国訪問させたい」と。昭和天皇は自らの退位を見据えて考えていた。

この退位発言をどのように考えれば良いのか。この問題に詳しい近代史の研究者吉田裕（一橋大学特任教授・近現代史）に分析してもらった。「ああ、これですね、1949年、この段階でまだ退位のことを言っているのは全く予想しなかった。1948年の末で退位は決着つけられたと思っていた。その後もくすぶっているんですね。―退位問題―。君主としての責任感があつて、一つは国民に対する君主としての責任、もう一つは皇祖皇宗歴代の天皇と天皇家の祖先に対する責任、今まで堂々と続いてきた国体を、危機に陥れてしまい敗戦という事態を迎えたそのことに對する道義的な責任、皇祖皇宗と国民と両方に対する責任感があることがよく分かりました」―吉田教授―

昭和天皇の意向を受けて、田島が退位について相談したのは総理大臣の吉田茂だった。拝謁記には吉田茂の意向がはっきり述べられている。「世の利巧ぶるものがそんな事をいうのもあるが人心の安定上そんなことは考えられぬ」と。―1951年8月28日―

1951年11月昭和天皇は地方巡幸に向かった。特別列車の中で、田島は天皇と忌憚のない話しをした。

天皇「私の退位云々の問題についてだが、帝王の位というものは不自由な犠牲的の地位である。その位を去るのは、むしろ個人としては有難い事ともいえる。現にマッカーサー元帥が生物学がやりたいのかといった事もある。地位に止まるのは、易きに就くのでなく、難きに就き困難に直面する意味である」と、

田島「恐れ多くでございますが、陛下は法律的には御責任なきも道義的責任があると思召され、此責任を御はたしになるのに二つあり、一つは位を退かれるという消極的のやり方であり、いま一つは進んで日本再建の為に困難な道に敢えて当たろうと遊ばす事と存じます。そして陛下は困難なる第二の責任をとる事の御気持である事を拝しまするし、田島の如きはいろいろ考えましてその方が日本国のためであり結構な結論と存じます」と、申上げ、昭和天皇と田島は、退位せず日本国の再建に当る道を選択した。退位を巡る昭和天皇と田島の判断にどのような背景があったのか。

4人の研究者(4人の分析プロジェクト)が分析に取り組んだ。その中心になったのが日本大学教授(近現代史)古川隆久で、感想を次にように述べた。

「昭和天皇は個人的には何度も言っていますけれども、辞めたほうが気が楽になるというのは偽らざる本心だと思えます。常識的に考えれば退位したほうがいいんだらうなど、多分昭和天皇も分かっていると思う。本来なら退位して当然の立場で留位することが皇室が国民に認められていくことにプラスになるか、すごく気になっていた。国民の意思が決定的に重要だという認識があるからこそ、気にしていることがしよつちゅう出てくると考えていいんじゃないか。国民に自らの立場をどのように伝えていくのか。昭和天皇にとって大きな課題が敗戦の道義的責任だった」

1951年9月、サンフランシスコ平和条約調印翌年の発効で、7年に及んだ占領が終わり日本は独立を回復することになる。独立に辺り国民に向けてどのようにすべきか。

1951年1月24日

天皇「講和となれば私が演説とか放送と言うか、何かしなければならぬかと思う。ここで私の責任のことだが、従来のようにカモフラージュでゆくか、ちゃんと実情を話すかの問題があると思う」と述べられる。

田島「その点今日からよく研究いたします」おことばの検討は田島に託された。1952年2月20日―これ以後1年余り、試行錯誤が続くことになる。田島

が起草したおことば案が8つ残されていた。(おことば案)で最も古いものは、1952年1月15日案である。5月3日のおことば案は、何度も修正された。天皇はおことば案に強く求めている文言があった。

天皇「反省というのは私にも沢山ある。私はどうしても反省という字をどうしても入れねばと思う」と、昭和天皇は田島に戦争への反省を語った。―御座所1952年2月20日―その回想は日支事変の回想から始った。「支那事変で酷いことが行われているということ、ひくい其の筋でない者からうすうす聞いてはいたが、別に表立って誰も言わず、従って私はこの事を注意もしなかった。市ヶ谷裁判で公になったことを見れば実に酷い。日中戦争の最中に起きた南京事件。―南京陥落1937年12月―日本軍は掠奪、暴行を行い、一般市民や捕虜を虐殺した。事件は戦後、東京裁判で問題となった。

天皇「私のとどかぬ事ではあるが、軍も政府も国民もすべてに、下克上とか、軍部の専横を見逃すとか、皆反省すればわるい事がある、それらを皆が反省して繰り返したくないものだという意味も、私が言うことのうちうまく書いてほしいと思う。」といった。

田島「其の点は目下一生懸命作文を練って居りま

す」と、田島は、天皇の求めに応じて反省の文言を書き加えた。過去の推移を三省し、誓って過ちを再びせざるよう、戒慎せねばならない。―3月4日案―

反省したい「過去の推移」とは何なのか。「拝謁記」の中で昭和天皇は太平洋戦争に至る道を何度も田島に語っていた。それは張作霖(ちようさくりん)爆殺事件に遡る。1928年旧満州の軍閥張作霖を関東軍が列車ごと爆殺した。事件を曖昧に処理しようとした総理大臣の田中義一を昭和天皇は叱責したが、首謀者が停職になっただけで真相は明らかにされなかった。その3年後、関東軍は独断で満州事変を起こし1931年―政府も其れを追認した。

昭和天皇は下克上ともいえる状況を憂いた。「考えれば、下克上を全く根絶しなかったからだ。田中内閣のときに張作霖爆死を厳罰にすればよかったのだ」。

陸軍の青年将校たちが起こしたクーデター二・二六事件。1936年。天皇は厳罰を指示し反乱は鎮圧されたが軍部の台頭が更に強まってゆく。天皇「青年将校たちは私をかつぐけれど私の真意を少しも尊重しない。軍部のやる事はあの時分は真に無茶で軍部の姿勢は誰でも止め得なかったと思う」。その後日本は泥沼の日中戦争へと突き進んでゆく。1937年7月―

1941年10月に成立した東条内閣は、12月ついに、アメリカ、イギリスに宣戦布告。太平洋戦争がはじまった。

天皇「東条内閣の時は既に、病が進んで最早どうする事もできぬという事になっていた。終戦で戦争を止める位なら、宣戦前か或いはもつと早く止める事が出来なかつたか、というような疑いを退位論者でなくとも疑問を持つと思うし、又、首相をかえる事は大権で出来る事故(ことゆえ)なぜしなかつたかと疑う向きもあると思うが」

田島「それは勿論あると思います」

天皇「いや、そうだろうと思うが事の実際としては、下克上でとても出来るものではなかつた。」と、語っている。―御文庫1951年12月17日―から。

研究グループの日大の古川教授は「深い後悔の念を誰かに話さずにはいられない、そういうものだと思う。いかにその局面が結果としてそうなつてしまつたことが、自分として残念だつたかということの裏返しだと思う。その量が多いのはそれだけ昭和天皇の後悔反省が多かつた。戦後でも実は、戦前戦中に生きていると言つてもいいような暮らし振りだつた。憲法上あるいは世間の常識から見れば統治権の総攬者天皇は主

権者でしたから、あの大事な場面は天皇が何とかすきだつたんじゃないかと思つている人が多いだろうと昭和天皇は考えています。なぜそれができなかったのか、自分なりに納得できる答えを探しているのがあの資料から伺えるかと思ひます」と述べている。

昭和天皇の、深い後悔の言葉を受け止めた田島は、おことばを書き直した。1952年2月26日―。

天皇「琉球を失つことは書いてあつたか」。

田島「残念とは直接ありませぬが、国土を失い、とあります。

天皇「そうか、それはよろしいが戦争犠牲者に対する厚生を書いてあるか」。

田島「犠牲を重ねとはありますが、その厚生のことにはある時の案にはありましたが削りました。と申上げますのは万一政治に結びつけられるとわるいと思ひましたからですが、之は大切な事ゆえ又よく考えます」

天皇「犠牲者に対し同情に堪えないという感情をのべる事は当然であり、それが政治問題になることはいと思ひが」

日本人だけで310万人が犠牲となつた太平洋戦争、中でも沖縄では県民の4人に1人が亡くなつた。

日本が独立した後も米軍の占領がつづいた。3月4日、田島は天皇の意向を受けて「ちよつと読んで見ますから訂正を要するところを仰せ頂きたいと存じます」と。

《事、志と違い、時流の激するところ兵を列強と交えて遂に悲惨なる敗戦を招き、国土を失い、犠牲を重ね、かつて無き不安と困苦の道を歩むに至ったことは遺憾の極みであり、日夜之を思うて悲痛極まりなく、寢食安からぬものがある。無数の戦争犠牲者に対し深厚なる哀悼と同情の意を表すると同時に過去の推移を三省し誓つて過ちを再びせざるよう戒慎せねばならない》修正文を読み上げると昭和天皇は、すかさず

天皇「内外にたいする感謝、戦争犠牲者に対する同情および反省の点はよろしい。内閣へ相談して余り変えられたくないネー」御座所1952年3月10日

田島は部下の宮内庁幹部に意見を求めた。その結果、修正を求める声が上がった。此れを田島は説明した。

田島「主な二、三の反対を強く致しましたが、其の第一は「事志と違い」を削除するという事でありました。何か、感じがよくないとの事であります」

天皇「どうして感じがよくないのだろう。私は、豈朕が志しならんや、ということの特に入れて貰ったのだし、それを言つてどこがわるいのだろう」

ここで問題となつたのは、事志しと違い、太平洋戦争は天皇の志しと違つて始まつた、ということである。昭和天皇は、開戦の詔書で次のように表明していた。

「今や不幸にして米英両国ときんたん（戦争の始まり）を開くに至る。豈朕が志しならんや。米英との戦争が私の志しといえようか」と。昭和天皇は、戦争が自らの志と異なつて始り、東条英樹に平和が望みだと伝えていた。

天皇「私はあの時、東条英樹にハッキリ米英両国と袂を分つという事は実に忍びないといつたのだから」

田島「陛下が豈朕が志ならんやと仰せになりましたも、結局、陛下の御名御璽の詔書で仰せ出しになりましたこと故、表面的には陛下によつて戦いが宣せられたのでありますから、志でなければ戦いを宣されなければよいではないかという理屈になります。田島は、たとえ、平和を念じていても実際には天皇の名で開戦を裁可したのだから、事志と違ひと言うのは唯の弁解になると思ひます。」と、いましめを申上げている。

一橋大学の吉田教授は「すごい微妙な問題ですけれど自分の志しとしては平和を望んでいたということですよ。開戦で言えば1941年9月6日の御前会議までは、昭和天皇は明らかに迷つていません、軍の強

硬派に対する警戒心があつて、ためらつていふと思ひますけど、その後は消極的な形であるにせよ、開戦は已むなしと考へたのは事実だと思ふ。最終的に軍の意思に同調する形になる、その部分はずつと落ちていくところですね」と言つてゐる。

田島は大学時代、国際親善と平和を説いた新渡戸稲造(にとべいなそう)に学んだ。戦争中から軍部に批判的だった。やはり田島は民間人で民間の組織の責任のあり方を分つていますから、それ(弁解)を普通の人達に言つたら、わかつて貰えないだろうといふことがあつて、天皇の立場でそれを言つてしまうと、他に責任転嫁してゐることになってしまうので、外には言わないほうが良いということになつてしまふので、外には言わないさにはあれは昭和天皇の偽らざる信頼できる人だけに言える本音の一つだろう。――3月4日案――結局、田島は、事志しと違ひを、勢いの赴くところに改めた。――3月17日案――戦争への反省を巡つて対話を進める中で、天皇が何度も口にした言葉がある。それは陸軍を中心に政治を左右した軍閥や陸軍への不満だ。

天皇「私は再軍備によつて旧軍閥式の軍が再台頭するのは絶対にいやだ」と言つてゐる。1950年6月朝鮮戦争が勃発。此れをキツカケに日本では再軍備に

むけた論議が始まる。警察予備隊発足1950年8月、予備隊が旧軍と同じ捧げ銃(ささげつつ)を行なつてゐるのを見た天皇は、次のように述べた。

天皇「ともすると、昔の軍に返るような気持ちを持つとも思えるから、私は例の声明メッセイジには反省するといふ文句は入れた方が良いと思ふ」と。

当時、アメリカは日本に再軍備を強く求めていた。1951年、吉田・ジョン・フォスター・ダレス会談――しかし首相吉田茂はアメリカのダレスに対し消極的な姿勢を示した。経済的な復興を優先したからである。吉田は証言してゐる。1955年録音。「ダレスが来た時だつたかな、再軍備で、冗談言つちやいけないと、そう言つてやつたんですよ。私はね再軍備などもつてのほかだと、日本の実情を知らないから、そんなことを言うんだと、出来るもんじやない。本人ダレスの前でそう言つたんですよ。日本としては、なるべくあいつを利用してアメリカにおつかぶせて、そして俟つしよう」と。ダレスの要求に応じない吉田首相、我が党は再軍備はいたさない。これに対して、公職追放を解除された保守政治家――鳩山一郎――たちは、改憲した上での再軍備を主張してゆく。日本にある警察予備隊は巡査？兵隊？なのか、これは軍隊であるから憲法改

正は必要だろう。(拍手歓声)

こうしたなかで、天皇は田島にどのような考えを伝えていたのか。

天皇は旧軍閥の復活に反対しながらも朝鮮戦争のさなか、共産勢力の進出を御心配していた。「軍備といっても、国として独立する以上必要である。軍備の点だけ公明正大に堂々と改正して、やった方がいい様に思う」

天皇は再軍備について、何度も田島に相談していた。天皇「吉田には再軍備の件は事憲法を改正するべきだという事を、質問するようにでも言わん方がいいんだろうネー」と気をつかわれている。

再軍備を巡って、異なる意見を持つ天皇と吉田茂。――歴史家秦郁彦談――研究者は次のように読み解く。「ここでね、日本の安全保障に対する昭和天皇のこだわり、憲法9条を改正して再軍備をする。主権国家として当然ではないんだらうか。しかし、旧陸軍の復活はダメだという前提がありますけれども、吉田は独自に再軍備の構想を持っていて、ちようど警察予備隊ができたというところですけど、日本の経済力が足りないうちにはできないから、それまで待ってもらいたいという意味をこめて、再軍備反対を唱えたんですね」。

質問と言う形で吉田茂に度々意見を伝えようとする天皇を、田島は次のように戒めている。

田島「そういうことは政治向きのこと故、陛下がご意見を御出しになりませぬ方がよろしいと存じます。たとい吉田首相にでも御ふれにならぬ方が宜しいと存じます」と。明治憲法では、「天皇は、神聖にして侵すべからず」とされ、大権を持った君主であった。戦後、新憲法で象徴となっても昭和天皇は総理大臣に内奏を求め、政治や外交について知ろうとされた。

一橋大学の吉田裕教授は「二つの憲法を生きた天皇なので昭和天皇は、明治憲法と日本国憲法、明治憲法の時代の意識が必ずしも払拭されていないところがあります。元首としての自意識それが一本ずつとあって、いろんな問題について自分の意思を表示しようとする、それに対し田島は日本国憲法の下で象徴天皇制を位置づけていくというハッキリした問題意識を持っていきますので、政治に関するような問題を天皇が言うのは絶対ダメという意思ははっきりしていて、象徴天皇制の枠の中に天皇を言葉はわるいですけども、押し止めようとした。そのためには、かなり厳しいことも諫めるような事を繰り返し申し述べて。日本憲法の下での天皇制、天皇なんだということがあって、此

のことは、田島の一貫した責任感のようでもあったと、感じますね。

1952年3月4日、田島は総理大臣吉田茂を訪ね、おことば案を説明した。吉田茂はおことば案につき、述べた。「大体結構であるが、いまだ少し積極的に新日本の理想というものを力強く表わして頂きたい」と、

「おことば3月17日案―吉田のこの求めに応じ田島は「新憲法の精神を發揮し、新日本建設の使命を達成することは、期して待つべきであります。」と、新憲法の文字を加へた。―3月31日―おことばの最終案が出来上がった。田島はそれを大磯にいる吉田茂あて速達で郵送した。おことば案を吉田首相は吟味。1952年4月18日―田島のもとへ思わぬ手紙が届いた。田島は早速、天皇に奏上した。

田島「一昨日夕方、手紙が参りました。所が、一節全体を削除願いたいという申し出でありました。其れは此の節であります。『勢いの赴くところ、兵を列国と交えて敗れ、人命を失い、国土を縮め、遂にかつて無き不安と困苦とを招くに至ったことは、遺憾の極みであり、国史に成跡に顧みて悔恨悲痛、寢食為に安からぬものがあります』」

そこには赤鉛筆で記された吉田茂の削除の文字が

あった。そこは天皇が戦争への悔恨を示した重要な部分である。吉田が削除を求めた背景には、当時、再燃しようとしていた退位論があった。

1952年1月、衆議院予算委員会で、中曾根康弘衆議院議員が質問した「もし天皇御みずからの御意思でご退位あそばされるなら、平和条約発効の日が最も適当であると思うのであります」と、吉田首相「これを希望するがごとき者は非国民と思うのであります」と応酬した。田島は天皇に此の退位論の懸念を伝えた。

田島「要するに、折角今声をひそめている御退位説を又呼び覚ますのではないかとの不安があると言う事でありまして、今日は最早、戦争とか敗戦とかいう事は言つて頂きたくない気がします。領土の問題が、困苦になったと言う事は、今日申しては天皇責任論にひっかかりが出来る気がする、との話でありました。其の次の勢いの赴く所以下は、兎に角戦争を御始めになつた責任があると言われる危険があると申すのでございます。田島としましては、昨年来、陛下が国民に真情を告げたいという思召しの出発点が消えて了つては困りますという事で、一応別れてまいりましたが、御思召し御感じの程は如何でございませうか」

天皇「私はそこで、反省を皆がしなければならぬと

思う。矢張り戦争が意思に反して行なわれ、其の結果がこんなになつたと言う事を前に書いてあるから分かるだろうが、それなしではいかぬ」と、言われる。

吉田首相の一節削除は何を反省するのかが曖昧になる変更であった。―御座所1952年4月21日―天皇は、なおも戦争の反省にこだわった。

天皇「あれからずつと考えたのだが、総理が困るといえば不満だけれど仕方が無いとしても、私の念願と言うことから、つづけて遺憾な結果になつたということにして、反省のところへつづけると言う事は出来ぬものか」と。田島は普段と異なる天皇を記している。『御不満ということ』である。

田島「終戦までのことは、終戦の時の御詔勅で一先ずすみといたしました、むしろ今後の明るい方面のことを、主として言つて頂きたいという方の考えであります。この際、戦争とか敗戦とかいう、生々しいことは避けたいといういみであります」

天皇「然し戦争のことを言わないで反省の事がどうしてつなぐか」

田島「戦争のことに關して明示がない以上ぼんやり致しますが、反省すべきことが何だという事は分かると思ひます」と申上げると、別に何とも仰せなく、曇

った表情に揮す。吉田の削除に不満を隠さない昭和天皇であった。此のとき、式典は12日に迫っていた。田島は詳細なメモを作つて準備した。このメモをもとに田島は天皇への最後の説得に望んだ。その要点は次のとおりだった。『国政の重大事、政府の意思尊重の要、祝典の祝辞に、余り暗い面は避けたし。遺憾の意表明、則ち退位論に直結するの恐れ、おことば―につきまして、田島が職責上、一人の責任をもちまして』

田島「やはり総理申し出のとおり、あの一節を削除願つた方がよろしいという結論に達しました。国政の責任者である首相の意思は重んぜられなければならぬと思ひます。」

天皇「長官がいろいろ、そうやつて考えた末だから、それでよろしい」

田島「御思召しを一年近く承りながら、今頃こんな不手際に御心配おかけし、御不満かも知れませぬものを御許し願ひ、誠に申し訳ございませぬ」

天皇「いや大局から見て、私はこの方が良いと思ふ」

田島は「新しい憲法の下で象徴となつた天皇は内閣総理大臣の意思を尊重すべきだ」と伝えた。

日本大学古川教授は「天皇が心の底から納得したかどうかは、ちよつと別ですけれども、田島は当時の政

府の当局者である吉田茂首相ととことん話し合つて納得してやっていると云います。象徴天皇制の枠の中で、天皇がどこまで政治的な発言ができるか、初めの具体的な例、結局、なるべく具体的な事は言わない方向がベストだろうと、落着いていった過程がこの資料で見える」といつている。

1952（昭和27）年4月28日サンフランシスコ平和条約発効し日本は独立を回復。3月3日皇居前広場で式典が行なわれ約4万人が集まった。

昭和天皇は国民の前で「おことば」を述べた。

天皇「さきに万世のために太平を開かんと決意し、四国共同宣言を受諾して以来年をけみすること七年、米國を始め連合國の好意と國民不屈の努力とによつてついにこの喜びの日を迎へることを得ました。ここに内外の協力と誠意とに対し、衷心感謝すると共に戦争による無数の犠牲者に対しては、あらためて深甚なる哀悼と同情の意を表します。又この際既往の推移を深く省み、相共に戒慎し、過ちをふたたびせざることを堅く心に銘ずべきであると信じます。新憲法の精神を發揮し、新日本建設の使命を達成し得ること、期して待つべきであります。この時に当り身寡薄なれども過去に顧み、世論に察し沈思熟慮、あえて自らを励ま

して負荷の重きにたえんことを期し、日夜唯及ばざることを恐れるのみであります」 万歳！万歳！万歳！新聞は、退位説に終止符をうち決意を新に独立を祝うと報じた。この、おことばはその後の日本にどのような影響を及ぼしたのか。

一橋大学吉田教授は「道義的な責任を認めてわびるニュアンスは明らかに消えています。重い責任をあえて背負う形で引き続き天皇としての責任を果たす議論だけになっている。天皇の責任の所在を天皇自身が明らかにする『おことば』があれば戦争に協力した國民の責任も含めて議論がはじまりますよね、それも大きな問題、もし出されていけば、すべての責任を昭和天皇だけに押し付ける訳にはいかないわけですから、戦前戦後を生きてきた政治家や戦争に協力した國民の責任をどう考えるのか。そういう問題にも發展してゆく可能性のある問題だと思ふ。曖昧な形で処理されてしまったのは悔やまれるところですね」

歴史家秦育彦氏によれば「結局、うやむやの内になつてしまった。それは天皇にとつては非常に心苦しかったんだと思いますけれどもね。昭和天皇はせめて國民に対するいわば、おわびみたいな、そういう言葉を入れたかったと、だけど吉田は「そんなものは入れる

な」と言う。ちょうど朝鮮戦争の特需がありましてね、それで景気が回復されて経済成長路線に踏み出していく、そういう未来が見えてきた。ですから国民も大多数、どん底から這い出て、経済成長路線にどうやら乗ったらしいと、みんな前のほうに希望を託す世相になった」と当時の日本を取り巻く環境に触れている。

1953年12月、田島は宮内庁長官の職を退き、その後、ソニーの会長に就いた。

1960年9月、御成婚直後の皇太子夫妻がソニーの工場を訪れた。迎える会長の田島道治(75歳)。

初めての民間出身の皇太子妃誕生について。田島は、その選定にも貢献があった。田島(1885〜1968)は85才で没。戦後40年以上もの永い間、象徴として国民と歩みを共にした昭和天皇は、1989年、⁸⁷歳でその生涯を閉じた。昭和から平成そして令和へ受け継がれてきた象徴天皇。その出発点を記録した「拝謁記」に田島は次のように記している。

「新しき皇室と国民との関係を、理想的に漸次いたしたいと存じます」。昭和天皇と田島道治の4年10ヶ月間にわたる対話。それは象徴天皇とは何か、あらためて私たちに問いかけている。

むすび

活字化はなかなかの作業で、さぞ読みづらった事とお詫び致します。「拝謁記」は、メモ魔とまで言われ、弱気を吐かぬ事では天下一品と評された宮内庁長官田島道治氏の昭和天皇との四年以上にわたる生々しい拝謁の記録で、占領下第一級の史料と言われます。

今回特に、昭和27年5月3日サンフランシスコ平和条約発効による日本の独立回復を祝う式典で、天皇がおことばの中に「戦争への深い悔恨と、二度と繰り返さないための反省の気持ち」を盛り込もうとしたものの、当時の吉田茂首相の反対を受けて削除を余儀なくされた。首相の判断は尤もながら、天皇の苦渋と自責は如何ばかりであったろうか、これほど深い天皇の揺るぎない考えには、驚きと共に強い感銘を受けます。

―古川教授によれば―【昭和の戦争というものは、現代に生きる我々にまで色々な意味で、重くのしかかっていると言うことを、改めて認識させる記録である。忘れてはいけないという事を語りかけてくれている記録ではないか】と結んでいる。

オンデマンドでテレビの画像は何時でも見る事が出来ますが、活字化したこの稿が次に伝わればこの
おわり